

支援者が捉える非行からの立ち直り

—非行少年の内的資質と支援者の要因に着目して—

武友 優歩

(発達心理学研究室)

問題

近年、非行研究において「立ち直り」に関する研究が多数見られるようになっており、この分野において少年の内的資質が着目されている。

白井・岡本・福田・栃尾・小玉・河野・清水・太田・林・林・岡本 (2001) は非行から立ち直った者の自伝分析を行い、「非行では居心地よくなる」「自己実現できない」ということに気づくことが立ち直りに向けた動機付けを高め、良き導き手となる援助者との出会いをもたらし素地になると指摘している。また、援助者との出会いを有効にし、社会適応に向けた努力を持続していくためには「抑うつに耐える力」と「ひたむきに物事に取り組む力」という2つの内的資質が重要な役割を果たすと指摘している。

「抑うつに耐える力」は、河野 (2003) によって、自分の心の中で起こっていることを直視し、自信のなさ、孤独、不安など受け入れがたい情緒を適応的に処理していく自己の内面に方向づけられた力であると定義されている。一方、「ひたむきに物事に取り組む力」は、こつこつと物事に取り組む自己統制力などを指す「ひたむきさ」、達成、熟達を目指す欲求を指す「創意工夫」、1つのことにこだわり目標を追求しようとする態度を指す「こだわり」の3つの要素から成り立ち (白井ら, 2011)、逸脱行為ではなく興味のある対象にこの力を向ければ非行から立ち直るとした。

しかし、これまでの非行少年の資質に関する研究には、問題点が2つ挙げられる。1つ目は、これらの内的資質の出現は幼少期の十分な被養育経験を前提としていることである。非行少年の中には幼少期に被虐待経験のある者も多く、特に非行臨床機関ではその割合が多いと考えられる。したがって、非行臨床機関において内的資質を育てる方略を得る必要がある。2つ目は、これまでは非行少年のみに着目した研究が多く、非行からの立ち直りにおける支援者の要因についてはあまり着目されてこなかったことである。

以上の問題点を踏まえ、本研究では非行少年の内的資質と支援者の要因に着目して、非行からの

立ち直りの様相を捉えることを目的とする。

なお、本研究では質的研究手法を用い、立ち直りモデルを実証的に検討することで、より非行臨床現場で実践可能な知見を得るものとする。

方法

調査対象者 A 県の児童自立支援施設、またその施設に隣接する公立小・中学校の職員7名 (男性5名、女性2名) であった。

手続き 調査対象者に対して約50～120分の半構造化面接を実施した。面接内容はICレコーダーに録音し、後日面接内容を逐語化し分析した。なお、参加者には事前 (面接実施日の1～2週間前) に質問内容を共有し、事前調査シートに取り組んでもらった。

質問内容 宮戸・米倉 (2016) などを参考に、インタビューガイドを作成した。質問内容は次の2つである。

(1) 非行からの立ち直りプロセスと心理的変容について：これまで指導した子どもの中で最も関わりの深い子どもについて①子どもの入所の経緯、②プロセスごとの子どもの変化と職員からの働きかけ、③特定の場面・イベントによる影響、④課題直面の際の指導法、具体的な声かけ、⑤施設での立ち直りプロセスの5つの内容について尋ねた。

(2) 非行からの立ち直りに必要な要素について：①成長を感じる時、②非行から立ち直るために必要な力、③「非行から立ち直る」とはどういうことかの3つの内容について意見を尋ねた。

分析方法 質問内容 (1) の語りに関しては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA; 木下, 2003) による分析を行い、質問内容 (2) の語りに関しては、テーマティック・アナリシス法 (TA; 土屋, 2016) によるカテゴリー分類を行った。

結果

M-GTAによる分析

分析の結果、45の概念【】、16のサブカテゴリー〈〉、8つの上位カテゴリー《》が生成された。概念間の関係を表した関係図を表し (Figure 1)、ストーリーラインの一部を以下に示す。

入所者は入所前後の問題行動を通して【大人への不信感】や【コミュニケーションの未熟さ】といった性質を見せるが、この性質が引き金となり、他の入所者や職員とのトラブルを起し、【逸脱行動】、【不適切な自己表現】、【嘘・ごまかし】といった〈問題行動〉を引き起こした。職員は【個別指導】や【粘り強い指導】で入所者に行動の振り返りを促し、次第に〈改善・成長〉が見られた。なお、このプロセスは繰り返し見られた。

また、施設では生活や行事など様々な機会が設けられており、他の入所者や職員と様々な経験をする中で、職員から〈肯定的な指導〉を受けたことで【成功体験】や【被承認体験】を得た。

以上のプロセスを通して職員との【信頼関係】ができ、さらに【等身大の自己表現】や【自己決定】ができるようになるなど次第に《内面の変化》が見られるようになった。

TAによる分析

「非行からの立ち直りに必要な要素」という視点でコーディングを行った結果、10のカテゴリー「」と3つのテーマ〔〕が生成された。〔他者への認識・能力〕として「他者への信頼感」、「他者を頼る力」、「他者視点の獲得」、「コミュニケーション能力」が、〔自己への認識・能力〕として「自己理解・自己受容」、「自己肯定感の向上」、自立への内発的動機付け、「規範意識」、「汎用力」が、〔子どもを取り巻く環境〕として「支え

のある環境」が示された。

総合考察

本研究では以下の3点が明らかになった。

1 点目は、立ち直りプロセスにおいて内的資質の向上が見られたことである。「抑うつに耐える力」は問題行動の後の捉え直しや、自己理解が進むことによる向上が示唆された。一方で「ひたむきに物事に取り組む力」は問題行動に対しての個別指導や施設での様々な機会経験による向上が示唆された。これらの背景として、職員や他の入所者に支えられた経験から構築した信頼関係を基盤に、児童自立支援施設の特徴的な機能である「育て直し」のようなことが起こっていると考えられた。

2 点目は、問題行動と改善・成長を繰り返す様相が捉えられ、この繰り返しを経て「抑うつに耐える力」の向上が示唆されたことである。河野(2009)が示したレジリエンスプロセスモデルと類似した循環であり、今後さらなる実証研究を行う必要がある。

3 点目は、先行研究同様に立ち直りプロセスにおける自己認識の肯定的な変容の重要性が示されたことである。この変容に対して、職員は信頼関係を構築する指導や肯定的な指導を行っていることが分かり、立ち直りに効果的な指導を明らかにすることができたと言える。

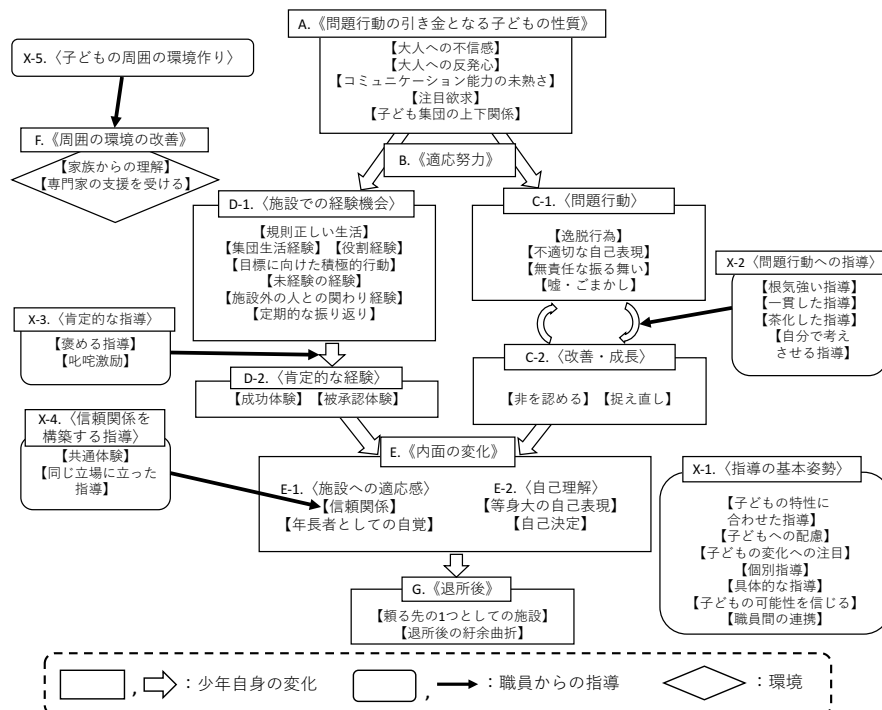


Figure 1. 児童自立支援施設職員が捉える子どもの立ち直りプロセス